

1. 今後の栽培管理

今年は6月中旬以降、定期的にまとまった降雨があり、適期に播種作業を行うことができなかつたほ場が多く見られます。ほ場毎に、生育の進捗状況や生育量に大きな差が出ており、生育が遅れているほ場では、開花期等の生育ステージも遅れる傾向にあります。

今後の栽培管理では、ほ場毎に生育ステージを確認し、それぞれのステージに合わせた管理を実施しましょう。

(1) 水管理

- 大豆は開花期以降に生育期間中最も多くの水を必要とし、不足すると落花・落莢により減収につながります。
- 一方で、子実が肥大する生育後期は、湿害により未熟粒や障害粒が発生するおそれがあるため、土壤水分を適度に保つように水管理を行いましょう。

◆ 湿害対策

- 明きよと排水路の接続を確認しましょう。台風等の大雨の後、明きよが詰まって停滞水がみられる場合は、速やかに補修を行い、排水を促しましょう。

(2) 雑草防除

- 9月以降、多くの雑草が開花して種子をつけ始めます。難防除雑草の多いほ場では早めに除草を行いましょう。
- 吊り下げノズル等を使用した、畦間散布や、畦間・株間散布が可能な場合は、雑草の草丈がノズルより低いうちに、散布します。(右図)
- 吊り下げノズル等がない場合は、雑草の蔓延を防ぐため、早めに手取り除草を実施します。



図1 畦間および畦間・株間処理の模式図

(3) 病害虫防除

◆ マメシンクイガ

- 8月下旬～9月上旬（成虫発生盛期）に1回目、その7～10日後に2回目の防除を行きましょう。
- 年1回発生します。発生した成虫が着莢直後の莢に産卵し、その幼虫が子実を食害します。
- 連作ほ場で多発します。特に連作4年目以降のほ場では、発生が多くなるため2回防除を行きましょう。



<幼虫と被害粒>



<幼虫の脱出孔>



<被害粒>

◆ フタスジヒメハムシ

- 8月下旬～9月上旬（第2世代成虫発生盛期）に防除を行きましょう。
- 年間3世代程度発生し、大豆作付1年目から被害が見られます。
- 子実を直接食害することはありませんが、若い莢の表面を食害し、傷跡から雑菌が侵入して黒斑粒・腐敗粒の発生を招き、品質低下の原因となります。



<成虫>



<食痕>



<上：黒斑粒 下：腐敗粒>

◆ 紫斑病

- 開花20～35日後（8月下旬～9月上旬）の間に1～2回防除を行きましょう。
- 紫斑病抵抗性は、ミヤギシロメ・タチナガハが「強」、タンレイが「中」となっています。ミヤギシロメでは1回防除で効果を得ることができます。
- 耐性菌出現を防止するため、同一系統薬剤の連用を避けましょう。



<紫斑粒>